

景観マガジン埼玉スタイル

S.Style no.8

HANACHO

座通眼鏡

座通眼鏡

10:00-18:00
定休日: 日曜 水曜 木曜

新店
SALE

JACK

KENTARO
DEUSHI

インタビュー 出牛 健太郎さん



仲町愛宕神社のケヤキ（本庄市指定文化財・天然記念物） 南北2本立ち、南樹：目通り周囲 4m、北樹：周囲 4.3m

埼玉県 of 西北に位置し、江戸時代の、天保14年（1843年）には、人口4,554人を数える中山道最大規模の宿場町として発展した本庄市。

現在の本庄市は、平成18年1月10日に旧本庄市と旧児玉町が合併して誕生しましたが、遡れば、奈良時代前後には児玉郡が設置され、武蔵七党武士団の一つである児玉党が児玉氏により勃興され、その後、氏名（うじな）は児玉庄氏から庄氏を経て、やがてその宗家（本家）は本庄氏を名乗り、そののち、児玉地区では、戦国時代に山内上杉が雉岡城を、本庄地区では、弘治2年（1556年）に本庄宮内少輔実忠が本庄城を築きました。

現在では、埼玉県の北の玄関口として、上越新幹線本庄早稲田駅を中心とする新たなまち、JR本庄駅周辺、児玉駅周辺のますますの発展が期待されています。（出典：本庄市HP）

今回は、本庄市役所の出牛健太郎さんにインタビュー。地元で生まれ育ち、いつも自然体で「まちの人」として業務に取り組み、本庄市は今、公民連携で動き出しています。

その中心で奮闘し、各方面からひっぱりだこのナイスガイが、今考えていることは…。



メタセコイア並木が美しい本庄市役所

〈秘書広報課での経験と児玉総合支所での取り組みが今に活かしている〉

■本庄市役所に入庁以来、今までどのような部所で仕事をされてきたのか、教えてください。

■平成25年度に当時の秘書広報課の広報広聴係に配属されました。現在の組織は広報課ですが、当時は秘書と広報が一緒の組織でした。そこで主に広報誌の作成とホームページ管理に4年間携わりました。

平成29年度からは3年間、児玉の支所市民福祉課福祉係に異動し、障害福祉や介護保険に関する業務を中心に、福祉分野全般に渡り、広く仕事に携わりました。

令和2年度から、現在の商工観光課商工労政係に配属されております。



旧本庄商業銀行煉瓦倉庫 明治29年(1896年)築 国登録有形文化財

■最初の配属先である秘書広報課で印象に残っていることはありますか？

■はい。秘書広報課では、いろんな情報が入ってくるのと、仕事をやればやるだけ紙面で形になるので、やりがいがありました。また県内の他の自治体の方や全国の自治体の方とつながって、仕事のモチベーションはとても上がりました。

特に SNS を利用して全国の自治体の広報担当がフェイスブックグループに参加しており、そこでは、全国の自治体広報のトップランナー達から手ほどきを受けることができました。

広報基礎、愛の100本ノックと呼ばれるグループで、良い意味で体育会的でして、投稿にコメントを返すルールなどがあり、自分にとってはとても刺激的でした。このグループは SNS だけでなく、自発的にオフ会を開催し、全国から自費参加で集まって広報談義をしたり、それは本当に勉強になりました。

■支所市民福祉課の仕事はいかがでしたか？

■僕はもともと児玉出身で、職場は自宅からも近く、福祉の仕事としっかり向き合うことができ、とても充実していました。仕事が終わればすぐに帰宅できる環境であり、入庁以来、2か所目の職場ということもあり、気持ちや時間の余裕が出てきました。

そこで、先輩と一緒に自主勉強会 HONMARU を立ち上げて、庁内の連携事業を一緒にやったりしました。勉強会は平成30～31年度に計26回も開催しました。



趣のある、三交通りのサイン

＜本庄 NEXT 商店街プロジェクトにより、民間の商店主や市民を伴走支援＞

■現在の商工観光課での取り組みを教えてください。

■はい。まず、本庄 NEXT 商店街プロジェクトですが、これは、持続可能なこれからの商店街を目指して、外部専門家、商店街の商店主、事業者、市民、商工団体、行政が連携して様々なアクションを起こしていく事業です。

H30・R1 年度に県事業として本庄駅北口エリアが指定されて実施していましたが、R2 年度からは市の事業として継続実施しています。R5 年度からは、本庄駅北口エリアに加え、児玉エリアにも横展開しながら行っています。あくまでも主体は民間の商店主や市民で、行政としては、伴走支援を行っていくものです。

僕は県事業で実施されていた時期から、仕事ではなく、個人として参加していました。その後 R2 年度に商工観光課に異動となり、そこからは担当者として本プロジェクトに関わっております。

■県の事業から市の事業になり、変わったところや、メリット、デメリットとかはありますか？

■県の事業では、応募された方と地元の各分野の役職者等で毎月会議を開催し、事業は KPI で管理し、成果を問う、みたいな感じでした。

それからコロナ禍に突入して事業が止まり、一度立ち止まって振り返りの時間がありました。その中で、R2 年度からの市の事業では、KPI 云々ではなく、まず自走していくことが必要だという方向性になりました。無理にやってもらうよりはやれること、やりたいことをやっていこうよ、という。

専門家（鈴木美央さん、建築家）の方からも、マーケットは自走していった方がいいし、まちの人がやりたいことをやらないと続かないよね、という意見を頂きました。

成果主義ではない、ここで暮らす地元の人たちがやりたいことを継続的にやっていこうよ、っていう考えをベースにしたんですね。もちろん従来型で予算つけてガーっといこうよ、というような意見があったことも事実です。

ちょうど新型コロナ関連の多くの経済対策事業も行っていて、何度かくじけそうになっていました…。

ただ、今思えば令和 2 年度は、新型コロナで止まった事業を関係者で振り返りながら情報共有することができた、とても貴重で良い時間であったと思います。これまで部会で動きながら全体会議も開いてきたのですが、共有や理解が進んでいなかった面もありました。

結果として令和 2 年度はそのあたりをほぐしながら、今後の方向性を 1 年かけてゆっくりじっくり共有できた年になりました。



駅北口エリア、三交通りのまちなみ

■本庄 NEXT 商店街プロジェクトの具体的な取り組みについて教えてください。

■はい。本庄 NEXT 商店街プロジェクトでは、様々な取り組みを行ってきております。現在も継続しているものでいうと、ほんじょうマルシェ（イベント部会）、本庄まちゼミ、本庄 MEET & TALK、月イチ兎玉を考える会(仮)などを官民連携して実施しております。

■主な取り組みの内容について教えてください。

■ほんじょうマルシェは、H30 年度から開催しています。それまでは、対象エリアである本庄の商店街のエリア内ではマルシェのような取り組みはほとんどされていませんでした。

それで、はじめはいきなりお店を呼ぶのではなくて、イベント部会を立ち上げて、まずはそのエリアを知って頂いたり、にぎわいの創出を目標に議論をすることから始めました。

マルシェ自体は公共空間や空き地、空き店舗、はにぼんプラザ（本庄市市民活動交流センター）の屋外などで開催していました。ただ、やはりコロナ禍で動きが止まってしまったんですね。

〈コロナ禍で立ち止まり、新たな展開を生み出す〉

■そうだったんですね。それでどのような取り組みをされたんですか？

■その中で、「JUNKANEKO EXHIBITION」という取り組みをやりました。これは、コロナ禍で事業がとまり、一度立ち止まり、実行委員会として関わってくださっていた人たちの議論の中で、「何がやりたいのか？やっぱり、やりたいことをやった方がいいよね」という話がでまして、その中で福島県のアーティストの JUNKANEKO さんとお知り合いの方がいらっしゃるのをきっかけに、「芸術祭みたいなものを作りたいね」という方向性が定まりました。

会場はもともと糸屋さんの空き倉庫をお借りして、アーティストさんの作品を飾らせて頂きました。これまでのマーケットとはまたちょっと違う形でイベントとして2週に渡った土日の4日間で開催し、大盛況なイベントになりました。



まちなかの空き倉庫を活用した展示

〈本庄七夕まつりの復活～人の賑わいが、まちの景観を変える〉

■「本庄七夕まつり」も復活されたとのことですね！

■そうなんです！ほんじょうマルシェ実行委員会では、「本庄七夕まつり」を約30年ぶりに復活させたんですよ！ちょうど僕はコロナ禍真っ只中のR2年度のタイミングで商工観光課に異動してきて、先に述べましたが、事業を休止し、立ち止まってみんなで考えていた時期なんです。

そこで皆さんの幼少期の思い出話の中で、「昔、七夕まつり楽しかったね」とか「その風景を次の世代に残したいよね」という話になり、復活させることが決まったんですよ。

ただ、初開催の令和3年度は、ちょうど緊急事態宣言が出てしまって、すぐに完全復活とはいきませんが、令和4年度からついに復活しました！

民間の方々や商工団体の職員さんなど、みんなで竹を切ったり、一緒に汗をかいて準備をすることで、ぐっと仲間として認めてもらえたというか、メンバーになれたな、という気がして、今でもとても印象深いです。

本庄七夕まつりを開催した、三交通りは、昔は賑わっていましたが、今はあまり人通りが多い所ではありません。ただ写真の通り、七夕まつり当日は多くの人で賑わい、まちの景観が大きく変わりました。

もちろん細部の作りこみについても拘りました。保育園の子どもたちの願い事の短冊をトンネル状にして飾ったり、氷柱の中におもちゃを閉じ込めて触ったりできるようにしたり、この七夕まつりの復活が次の世代の記憶に残るように、工夫してイベントを開催いたしました。



復活した本庄七夕まつり、大勢の人で賑わう三交通り

■素晴らしい取り組みですね！その後の動きはありますか？

■ハロウィンのイベントを、本庄マルシェ実行委員会、本庄商店街連合会、レンガ倉庫を管理しているNPO 法人さん、商工会議所の青年部など、いろんな団体が共催して開催しています。



場所は銀座通りです。こちらは最近にぎわいがではじめているところとして、当日は写真を見てお分かりの通り、大盛況なイベントになっています。

サンバチームを呼んだり、商店街連合会のマーケットがあったりと、各団体がそれぞれ本当にやりたいことを詰め込んだイベントになっております。

趣のある、銀座通りのサイン

ハロウィンのイベント、大勢の人で賑わう銀座通り



〈児玉地域への横展開〉

■児玉地域での取り組みについて教えてください。

■はい。児玉地域とは、旧児玉町が旧本庄市と合併する前の旧児玉町のエリアのことですが、「月イチ児玉を考える会(仮)」という取り組みを実施しております。(仮)というのは、会の名称が正式に決まるま

でと僕が勝手にとりあえず勝手に名付けたものを、参加される皆さんがそのままいいとおっしゃるので、その名称がとりあえずそのまま今でも続いている次第です（笑）。

本庄地域では七夕まつりが復活したということに対して、「児玉でも昔やった。すごく楽しかったね」という話の中、メンバーの一人から「じゃあ、やってみんべえ」という声上がり、これもそのままタイトルになり、正式に「ミニマーケット 七夕やってみんべえ」を開催しました。実はクリスマスの翌日にも「児玉だしクリスマスもう1日やってみんべえ」というイベントをやる予定です。

（※インタビューは12月中旬に行いました）



児玉地域でのイベントポスター掲示、地元特産の胡蝶蘭、ポインセチアで飾られた本庄市役所ロビー

〈民設民営の公園立ち上げ～本庄銀座 GOODPARK～民間の力で新たな景観が生まれる〉

■出牛さんは、本庄市内の民設民営の公園の立ち上げにも取り組まれたとお伺いしました。

■本庄銀座 GOODPARK ですね。こちらはもともと市で民地をお借りしてポケットパーク事業を実施しておりまして、市の空き家対策として、建物および土地の所有者が空き家を解体する代わりに、市が一定期間ポケットパークとして土地を借入れ、その期間は空き地の固定資産税を免除する、といった制度を運用していました。

事業が終了し、市が土地を所有者さんにお返した後、なかなか活用されないまま雑草が生い茂ったりしていたのですが、寄居町の公共の土地を利用して GOODPARK をやっていた「一般社団法人ドコデモヒロバ」さんが移設先を探していました。また、当該地の近くでカフェをやられている本庄デパートメントさんもその場所を使いたい意向も聞いており、まちなかの賑わいの創出を目指す、市の政策意図にも合致していましたので、市が土地のオーナーさんへ、民間でこういうことをやりたいという方がいる、と伝えさせて頂いた結果、快く土地をお貸し頂けることになりました。結果として、民設民営の公園が誕生しました。

本庄銀座 GOODPARK では、一般社団法人ドコデモヒロバさんが植栽やファニチャーを設置し、本庄デパートメントさんがマーケットを開催し、市が予算をかけることなく、まちなかに新たな景色、新たな景観が、民間だけの力で生まれています。



本庄銀座 GOODPARK～銀座通りと旧中山道交差点近くの土地を活用



本庄銀座 GOODPARK～移設可能な植栽やファニチャーを設置



多くの人で賑わう、本庄市役所中庭でのマーケット

〈公共空間利活用実証実験～本庄市役所中庭でのマーケット開催〉

■市役所の中庭でもマーケットを開催されたと伺いました。

■はい。これは僕が公共空間利活用実証実験として令和4年度から2年間やりました。

市役所の建物の間には中庭があり、本来、人が集うために設計されているはずなのですが、現実には公用車置き場になっていて、正直すごくもったいないな、と元々この事業を始める前から思っていました。

中庭ですので、建物の構造上、入り口から開かれている場所ではないので、行きづらい場所なんですけど、逆に囲われた空間で、中にいるととても居心地がいい場所なんです。

そんな中、コロナ禍で打撃があった飲食店の支援を何かしたいと思っていたことと、中庭が使われていないことがつながり、先例として、群馬県庁の芝生広場でマーケットが開催されていたことを参考にさせてもらい、公共空間利活用の実証実験として、R4年5月からR6年3月まで毎月マーケットを実施しました。その後、市役所の中庭だけでなく、前庭や公園、駅内の広場など、予算ゼロで全23回実施し、平日の小規模なマーケットながらも、合計で700万円を超える売上げがあり、経済効果もあったかと思えます。

これまでは市役所の中庭などは、民間事業者が利用することはできなかったのですが、実証実験と調整を重ね、商工観光課が事業認定することで、現行のルールを順守しながら、民間事業者に行政財産使用

料を支払って頂き、マーケットを開催できる運びとなりました。

〈連携のための仕掛け～本庄 MEET&TALK、kinai HONJO〉

■お話頂いているこれらの事業は、様々な分野の方と連携されていると思います。その連携をどのように行っているか、その根幹にかかるノウハウ部分について教えてください。

どの地域でもその部分が一番難しく、知りたいところであると思います。

■はい、おそらく皆さんがお知りになりたいのは、このような連携をするために具体的にどのようにすればいいのか、どのように仕掛けているか、ということかと存じます。

具体的に、連携のための仕掛けとして、現在、本庄 MEET&TALK と kinai HONJO を展開しております。

本庄 MEET&TALK は、R3 年度から実施しております。それまでは各分野のキーマンを集めクローズな会議を開催していましたが、「キーマンはあるけどプレーヤーがない」状態でした。それでクローズだった会議からオープンで誰でも参加できる場を作り、まちに関わるきっかけづくりや、情報共有、人材交流、学びの場の機能を持たせて実施しています。

まちで起こっていることや、まちの動きに合わせたゲストスピーカーを呼んだり、こちらから視察に行ったり、一回一回考えながら実施しています。

まちづくりに関して、何かをやるかやらないのか、といったアプローチではなくて、現在、まちづくりに関わりたい層は、実はライトなかかわりを求めていることを感じています。このようなフラットでゆるくかかわりやすい、オープンな場を作ることで、より交流、連携が図られるものと感じています。

空き店舗で開催したり、公共施設の会議室ではなく、なるべく出入りしやすいオープンな場所で開催したり、トークだけにとらわれずにまち歩き形式を併用したりしながら開催しております。



本庄 MEET&TALK、はにぼんプラザ（本庄市市民活動交流センター）にて開催

kinai HONJO については、よりまちなかに関わりやすい仕組みとして、ネームとチラシ、ロゴを作りました。この kinai HONJO っていうのは、本庄の方言で「本庄においでよ」というのを「来(き)ない?本庄に」って言うんですが、それと「商い」をかけてネーミングしています。

市役所に相談してね、となるとハードルが高く感じると思うので、そのハードルをなるべく下げるために、親しみやすいチラシを作り、ライトに相談できるような場になるように作成しました。

〈「斜めの連携」が大切〉

■連携の取り組みすべてが素晴らしいです！「連携の質」にもこだわっている感じですね！

■はい。連携って、取り組んでみてわかったのですが、縦と横の連携はよく言われますが、「斜めの連携」が結果としてうまく効いているのかな、と思っています。

ここでいう「斜めの連携」とは、同じ業界や組織の中における縦と横の関係ではなくて、業界や組織は違えども、共通の目的に向かって、お互いにその境界を自発的にちょっと越えて取り組む姿勢のようなものですが、この「斜めの連携」が非常に重要であると痛感しています。

■「斜めの連携」、確かにそれは重要な視点であると思います。一方で公民連携においては、法律や条例もあり、公平性や透明性が求められますが、出牛さんは、異なるステークホルダーである、民間、商工団体、行政の関係のあり方について、どのように考えていますか？

■僕は対等な関係だと考えています。それぞれに得意分野や役割があって、それをどううまく組み合わせるのか、それを考えることが公民連携だと思っています。

僕は、「自分は市役所職員の立場を持った、まちの人」ということを常に意識しています。これは僕が地元出身であり、常に「まちを良くしたい」という気持ちがあるからだと思っています。

民間や商工団体の皆さんは、まちをもっと盛り上げたい、良くしたいという想い一つで、本来なら商売や仕事ができる貴重な自分の時間を削って動いてくださっています。その中で、じゃあ自分は何ができるのか、何をしたいのか、市役所職員としては何をすべきかを考え、僕は、お互いに「まちを良くしたい」という共通の想い

の中で、良い関係が構築されるように、そんな意識を持って動くようにしています。



本庄クリスマスマーケット 2024～本庄早稲田の杜中央通り線歩道にて

〈動いている人たちと一緒に行政が伴走することで、「まちの景観」が動く〉

■出牛さんは、昨年、本庄市で開催された埼玉県景観行政団体施策研究会で、講義をされていたらっしゃいました。その中で、「まちの景観」について触れられていらっしかったですね。

■僕は都市計画の専門家ではありませんし、都市計画も市民の意見をしっかり聞いて進められていることはもちろん承知しておりますが、これまでは行政主体で進めて動いてきたことも多い印象です。

全国どの自治体でも、何かを壊して何かを作れば、新しい民間が入ってくるイメージがあった時代があったように思います。

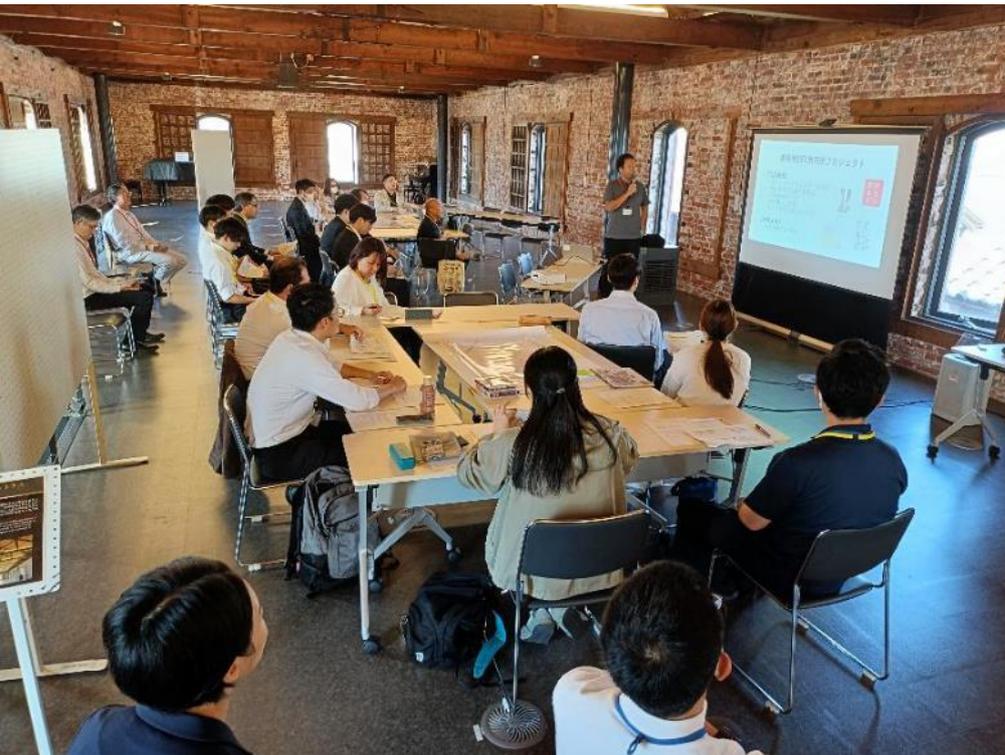
今はそういう時代ではなくて、まちでは動いている人たちが既にたくさんいらっっしゃいます。

行政は、その動いている人たちに一緒に伴走するだけで、空き家や空地の利活用が進み、通りの賑わいなど、「まちの景観」が動き出します。マーケットもしかり、空き店舗が埋まっていくこともしかり、結果として、今、本庄の「まちの景観」が動いています。

例えば千葉県の鎌ヶ谷市では、ホームページの中で「景観とは、道路、公園などを人が眺めることで、

ずっと残したい、懐かしいなどの気持ちがあく風景のこと」、「景観を良くするとは、暮らしを豊かにすることにつながる。魅力的な景観を創出することで、市民の愛着や誇りが芽生え、一層魅力的な景観まちづくりへの取り組みが高まる。さらには、来訪者の増加が地域経済の発展に貢献していく。」そして「景観を良くするうえで大切なこととして、市民・事業者・行政が一緒に取り組む。」と表現されています。

まさに、それが今、僕が取り組んでいることすべての根幹ともいえます。



「公民連携で動き出す本庄」講義中の出牛さん

埼玉県景観行政連絡会議 第1回施策研究会 R6.10.31 本庄煉瓦倉庫にて

■素晴らしいお話をたくさん聞かせて頂きましたが、仕事でうまくいかない事はありますか？

また、それに対してどのように対処されているのでしょうか？

■うまくいかないことだらけです（笑）。

ただ、何事もチャレンジだと思って、取り組むようにしていますし、チャレンジにはうまくいかないことも付き物だと思っています。

あとは、「自分でコントロールできないものをコントロールしようとしなさい」、ということは大事にしています。コントロールできないものは、うまく身を任せることが大事だなと、本庄NEXT商店街プロジェクトを通じて学ばせていただきました。



WORK+PARLOR (カフェ+コワーキングスペース)
銀座通り 合同会社本庄デパートメントの拠点
築 100 年超の料亭を改装

**DOT+ALLEY (ayatori こどもふく+本庄デパートメント
アトリエ+週末ドーナツ) 三交通り突当り**
三浦屋 (菓子店) 空き家利活用
(出牛さんは、市役所の仲間と 3 人で「一般社団法人 ochanoma」
を設立、市内の空き家の片付けを行い、オープンにして魅せてい
くことで、活用してくれる人につなぐ取り組みもされています。)

■ これまでお話を伺っていると、出牛さんはとても自然体な感じがします。

■ そうですね、何でしょうか、流れに身を任せてきた、ではないですが、流れに身を任せつつも、こうなったらこれが必要だな、みたいな事を常に考えてきたからでしょうか。

もちろん、R2 年度に商工観光課に配属された時には、NEXT 商店街が県から市の取り組みに移行されたタイミングだったので、その仕事をやるんだらうな、やるなら前向きにやろう、という決意がありました。

■ 出牛さんは、仕事はもちろんのこと、市役所の仲間と 3 人で「一般社団法人 ochanoma」を設立され、市内の空き家の片付けにより、オープンに魅せる (見せる) ことで、活用する人につなぐ取り組みなど、プライベートでも積極的に活動され、多くの団体と交流し、イベントの主宰や参加をされているとのこと、本当に頭が下がる思いです。まだまだお話を伺いたいところですが、最後に何か一言頂けますか？

■ いやいや、僕は一般的な普通の公務員です。まちが動いているのはまちの人達がすごいからだと思っています。僕は、自分のまちを良くしたいと思っている人達にはたくさんいて、そのアクションの場が増えてくるとまちは動いてくる気がします。我々公務員はその人たちをしっかりと支えつつ、自分もまちの人として、当事者意識を忘れないように自分のまちとしっかりと向き合うことが大事だなと思っています。



マリーゴールドの丘イルミネーション、写真左側は上越新幹線本庄早稲田駅

■本日は貴重なお話をたっぷりと、ありがとうございました。

■ありがとうございました。

***** 聞き手、編集：埼玉県景観整備機構 都市づくり NPO さいたま 細田 隆
監修：埼玉県都市整備部都市計画課



出牛 健太郎（でうし けんたろう）

1990年本庄市（旧児玉町）生まれ。2013年に本庄市役所へ入庁。

秘書広報課、支所市民福祉課を経て2020年から現在の商工観光課へ異動。商業支援や創業支援を担当するほか、公民連携した商店街支援や公共空間利活用等を行っている。

2022年3月に市役所の仲間と3人で「一般社団法人 ochanoma」を設立。

- 本庄 NEXT 商店街プロジェクト

<https://www.city.honjo.lg.jp/soshiki/keizaikankyo/shoukoukankou/tantoujouhou/nexthonjo.html>

- 本庄 MEET & TALK

https://www.city.honjo.lg.jp/shigoto_sangyo/sangyoshinko/chushinshigaichi_shotengai/13054.html

景観マガジン埼玉スタイル S. Style no. 8

監修：埼玉県都市整備部都市計画課

発行：埼玉県都市整備部都市計画課 2025年2月

〒330-9301 さいたま市浦和区高砂 3-15-1